



自粛ではなく、あきらめない保育を保護者と共に

園長 野中 泉

大津市の保育園児が散歩中に巻き込まれた死亡事故から4日後の5月12日、みかん組(5歳児クラス)の懇談会で、ひとりのお母さんがこんなふうに担任に尋ねました。「日報に、担任から子どもたちにも、大津の事故のことを話しましたと書いてありましたが、どんなふうに、何を伝えたのでしょうか」。子どもたちが巻き込まれる悲しい事故が起こったこと、命の大切さや、気をつけて道を歩こうということなどを話したと答えた担任に対してそのお母さんは、重ねてこんなふうに行きました。「悲惨な事故の話をそのまま子どもにする必要があったのでしょうか。今回の事故は、子どもには何の非もないものです。子どもに、『だからもっと気をつけなさい』と教えるような話だとは思わないのです。せっかくしてもらったその話で、命や死という言葉にとっても敏感なうちの子は、怖いとか悲しいということばかりを重く受け止めてしまったようにも感じて、戸惑っています」。

穏やかに、でもきっぱりと語られたその言葉を皮切りに、溢れる情報の波の中で子どもに伝える情報をどう取捨選択していくのかという意見や、この報道で自分は何を感じたか、その上で、子どもたちにどんな経験を積んでほしいと願っているのかなどが参加のお母さんたちの口から次々に語られました。保育士側からも、改めて、大事にしてきた保育への思いが話され、ひとりのお母さんの真摯な問いかけから、参加者全員で「事故」を真ん中に大事な気づきと語り合いの場が持てたことを、とても大切に受け止めています。懇談会が終わっても、語りつくせなかった話の続きを数人のお母さんたちと立ち話でしたのですが、あるお母さんがこんな話をしてくれました。「上の子が小学生の頃、運動会の組体操で、ピラミッドが禁止になった。前年に他の学校で事故があったから。でも、事故がある度に自粛していたら、子どもたちは、どんどん不自由になるって思う」。

事故報道の翌朝、私は別のクラスの担任から「のなちゃん、今日は、散歩は自粛した方がいいですか?」と尋ねられました。震えが止まらなかった事故現場の映像を思い出しながらも「散歩にいかないなんて選択肢はない。気をつけて行ってきて」と送り出したその晴れた朝の光景を、お母さんたちの言葉と一緒に、もう一度思い返しています。

大津のような事故がうちの園では起こらないと言い切れる根拠はどこにもありませんし、事故で愛する子どもの命を突如奪われた人たちの身を切られるような悲しみを、小さなことだなんて到底言えません。でも、そうだとすると、いや、だからこそ、私は子どもたちが、子ども時代というかけがえのない育ちの時間に、散歩に出られる今日を保障し続けたいと願わずにはられません。友だちと手をつないで歩いた朝のおひさまのあたたかさ、気をつけて歩いた横断歩道。しゃがみこんで見つけた野の花やどんぐり。足をすりむきながら登った崖の道や、走って虫を捕まえた草むら。『大人になってから』では取り戻せない当たり前の子どもの育ちの時間と遊びの経験をどんな時代になってもあきらめたくない。私たちの必死なその願いを支えるのは、「預ける側」「預かる側」という枠組みを平気な顔ではみ出して、共に悩み、語りあい、時にきちんと苦言も呈してくれながら、私たちの保育を信頼し続けてくれているアトムのお母さんたちの後押しだ、そのことに、改めて励まされます。さあ、今日もアトムのお母さんたちは歩き出します。彼らが自分の足でたくましく進むその道が、明日も、その先の明日も、ずっと守られますように。

※追記：職員で組織する安全委員会では、散歩コースの危険箇所の見直しをしています。